

「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」検討会議（第2回）
（令和6年9月4日）

■日時 令和6年9月4日（水）10時00分～12時00分

■場所 長野県庁本館棟8階教育委員会室（Web会議システム併用）

1 開会

（水野課長）

ただいまから、第2回一人ひとりに合った学び実践校（仮称）検討会議を開催をさせていただきます。私は本日の司会を務めます、教育政策課長の水野と申します。どうぞよろしく願いいたします。

本日は、12時までの会議とさせていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

それでははじめに、長野県教育委員会教育長、武田育夫より御挨拶を申し上げます。

2 教育長あいさつ

（武田教育長）

皆さんおはようございます。大変お忙しい中、前回に引き続き会議に御出席いただきありがとうございます。

長野県教育委員会では、一人ひとりに合った学び実践校、名前は仮称なのでまた変えていきたいと思いますが、内容についてアップデートしてまいりまして、第1回会議から、だいぶ具体化されています。今日は第2回検討会議ということで、3回目はまた9月中にありますけれども、また協議をいただければと思います。

昨年度から、信州学び円卓会議というのを知事部局の県民の学び支援課で進めてきているところでありまして、信州大学の荒井先生を座長にして、風越学園の先生とか学校関係者、あるいは村長さんとか市長さん、フリースクールをやっておられる方とか、いろんな長野県の教育に関わる方から意見をいただいて、7月にメッセージをつくったところがあります。

その中で、円卓会議からのメッセージのいちばん下に、知事と教育長は、先頭に立ってやっていってくれというふうに円卓会議の方から御提言をいただいたところがあります。どんな提言があったかという、6項目ありますけれども、我々は基本的には現場を応援していくと、子どもにいちばん近いところにいる人たちをサポートしていくことが大事ということでありまして、それを基に、知事と私で「学び・教育改革に臨む私たちの決意～日本の学びの「新しい当たり前」を信州から創る～」という共同メッセージを出したところ

です。

これを旗にして、これから県内の各団体と、子どもを大事に、子どもにとって楽しい学びをみんなで創っていこうということでいきたいと思います。その1つに、この「一人ひとりに合った学び実践校」というものが位置付いていくということで、御理解をいただければというふうに思います。

今日議論していただくキーワードも、学校を変えていくっていうときにも、いちばん大事にしなきゃいけないのは、現場の先生たちと学校の認識だというふうに思います。行政がこっちに旗を振ってもなかなか先生たちが変わっていけない、そのところをどうしていくかっていうことをですね、ぜひいろんなところから御意見をいただいて、実際にこういう場合はこうだとか、現場ができるようになっていく意見をいただきたいと思います。

（水野課長）

それでは本日の配付資料の確認をさせていただければと思います。次第、構成員・出席者の名簿、座席表、それから第2回会議資料というものでございます。以上ですが、よろしいでしょうか。

それでは、これ以降の会議の進行については、座長にお願いしたいと思います。茅野座長、よろしくお願いいたします。

3 議事

（茅野座長）

皆さん、前回に引き続き、よろしくお願いいたします。議事に入りたいと思います。

今回も意見交換を中心に進めていきたいと思いますが、その前段として、前回と同様、事務局から御提案をいただいております。前回の第1回会議の議論の内容と、その後の7月から8月にかけて行われた市町村教育委員会と県教育委員会との懇談会で出された市町村教育委員会の意見を整理した上で、前回提案された実践校の進め方のたたき台についてブラッシュアップしたのになります。

まず、この資料を事務局から御説明いただき、その上で意見交換に入っていきたいなと思います。それでは事務局からお願いいたします。

（石川係長）

はい。教育政策課企画係長の石川と申します。画面共有をさせていただき、10分間ほど説明させていただきます。

「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」検討会議（第2回）
（令和6年9月4日）

表紙をおめくりいただきまして、2ページ目をお願いいたします。こちらは、6月の第1回検討会議のおさらいでございます。まず実践校の理想像については、子どもたちの前に世界を用意してあげること、学びを通して自己肯定感が高まっていること等といった御意見をいただきました。重要な視点については、関わる全ての人のウェルビーイングに資すること、個別最適な学びと協働的な学びは両輪であること等といった御意見をいただきました。打ち出し方、取り組み方については、目指すべき方向性は県が旗を掲げるべき、具体の手法は地域の自主性に任せるべきといった御意見をいただきました。実践校の展開方法と県の支援については、学校ではなく、地域が実践校に手を上げるパターンがあっても良い、県は各取組に対して意味付けを行うことで、実践者を励ましつつ、伴走支援できるようなコンサル力が求められるといった御意見をいただきました。

3ページ目を御覧ください。この7月から8月にかけて、市町村教育委員会と意見交換を実施いたしました。その中で、市町村の皆様からは、実践校の取組は興味深い、あるいは実践校に応募したい等、概ね好意的な御意見をいただきました。その一方で、学校現場のリアルな課題や疑問についての御指摘もいただきました。

詳細については、次の4ページを御覧ください。左上、現状制度との兼ね合いに関しまして、通学区制度や学習指導要領との整合性についての御指摘がありました。また、資料の右側の方ですが、現場は疲弊しており、新しいことに取り組む余力がない等といった厳しい御意見もいただきました。資料下半分のリソースに関することといたしまして、本当に加配がつくのか、あるいは加配の期間はどれくらいか、相応の能力のある人物を配置してほしいなどといった御意見もいただけてきました。

次の5ページ目をお願いいたします。話は変わりますが、先程冒頭の教育長挨拶にもございました通り、信州学び円卓会議からメッセージをいただきまして、県知事と県教育長が、ともに今後取り組んでいくということを表明いたしました。

次の6ページをお願いいたします。ここからが本日のお話の本筋に入りますけども、こちらのスライドはですね、第1回の御議論等を踏まえまして、実践校の取組イメージを登山に例えてみました。まず、①番の目指すもの、ゴールについては、どの地域どの学校であっても不変のものとして、県が旗を掲げるべきだというふうに考えております。次に②番進め方、ルートについては、各地域に任せるべきもの。ただし、相応の装備がなければ登山はできないので、装備については③番、県の支援が必要であるというふうに整理をいたしました。

次の7ページ目をお願いいたします。こちらの4項目は、本日御議論をお願いしたいと思っております。この後、順次説明してまいります。

8ページをお願いいたします。まず、目指す学校像についてです。ますます変化が激しく予測が困難で唯一の正解がなくなっていくこれからの時代においては、一人ひとりが自分の個性や可能性を認識するとともに、多様な他者を尊重し、共存しながら持続可能な社会をつくっていくことが求められます。そのために、学校においては、常に子どもを主語とし、大人が子どもを信じ、教員は子どもに教えるだけでなく、子どもからも学び、常に子どもの視点で考えられるような学校に変革していく必要があります。学校を変革するには、学びや授業の変革だけではなく、学校の仕組みそのものの変革にまで踏み込む必要があると考えます。学校の仕組みの変革にあたっては、地域の資源を生かしながら、常に目の前の子どもの姿に心を寄せ、学びに真摯に向き合ってきた信州教育の在り方にヒントが詰まっているのではないかとこのように考えております。こうしたことを踏まえまして、目指す学校像を資料の下の方のカラーの3行の部分のように整理してみましたが、いかがでしょうか。後ほど御議論をお願いしたいと思います。

次の9ページ目をお願いいたします。こちらは、目指す学校像について、この検討会議を立ち上げた当初事務局が持っていたイメージから、今回ブラッシュアップをした部分について説明したものでございまして、赤枠の部分をご覧ください。まず、①番といたしまして、当初我々は「学びのやり方」にフォーカスをしておりましたが、学校に存在する様々な仕来たりやルールも含めた「学校のやり方」といったものについても、子どもたちが自ら選択、あるいは決定できることが望ましいのではないかと、このように考えました。次に②番といたしまして、目指す学校像の実現に向け、教員の役割はティーチャーだけではなく、コーチャーやファシリテーターにも広げていく必要があるというふうに考えました。

次の10ページ目をお願いいたします。こちらは、実践校の進め方、要件についてでございます。これまで県や市町村の教育委員会では、授業や学びの改革など、様々な切り口から実証研究事業を実施してまいりました。こうした実証研究事業の成果を活かしつつ、「一人ひとりに合った学び実践校」ではさらにもう一步踏み込みまして、学習指導要領等のルールと、限りある人的リソース等の中で、できる最大限の範囲で子どもが主体の学校へとアップデートしていきたいというふうに考えております。こうしたことを踏まえ、進め方、要件を資料下の方のカラーの部分AからEの5項目により整理してみましたが、いかがでしょうか。なお、この実践校の役割といたしましては、その成果を他の学校にも広めていくことも期待されるため、Dに記載の通り、学校公開等による共有、あるいはEに記載の通り子どもが主体ということで、子どもが、その学校公開にあたっては、子どもたちが案内役を担うといったような要件も設定してみました。

次に11ページ目をお願いいたします。これまでの実証研究事業を踏まえ、学校の仕組みの変革に関する取組を例示、整理をしてみました。特に左上のカラーの部分が、我々が考えている学校の仕組み変革に関する項目ということで整理をいたしました。それ以外にも右側ですね。子どもへの対応だったり、左下学び・授業の改革であったり、環境ツールの最大活用といったことで、各項目を整理してみましたので、御参考に御判断いただければというふうに思います。

次12ページをお願いいたします。こちら御参考ですけれども、こちらは令和2年度から令和5年度にかけて、我々県教委が取り組んできた各実証研究事業について整理をしたものです。左側の長野県の地図を御覧いただきますと、色を塗ったところが何らかの取組を小・中学校でやったということですので、多くの市町村でこの実証事業が行われてきたことがお分かりになるかなというふうに思います。

次の13ページ目をお願いいたします。次は県の支援の在り方についてです。資料のカラー部分を御覧ください。まず、実践校の取り組みが円滑に進むよう、Aの人材資源といたしまして、加配を行うことや先進地域への視察費用の支援を検討したいと考えております。また、実践校やそれを支える市町村教育委員会が、自信を持って取組を進められるよう、Bに記載の通り、県教委内に設置予定の学校改革支援センターにより伴走支援をしていきたいと考えております。さらに、実践校の成果を県内他の各学校に広めていくため、Cに記載の通り実践校における授業公開を支援したり、関係者同士が情報交換できるような環境を用意したりするといったことも考えております。

次14ページ目ですけれども、先程言及いたしました学校改革支援センターの、伴走支援のイメージでございます。まだイメージの段階ですけれども、県の教育長を筆頭に、県庁の本庁に置くリーダーや各教育事務所、県内5箇所にありますけれども、各教育事務所に置くエリア担当者、また県の総合教育センターに置く研究担当者や外部のアドバイザーの方等から構成をし、加配教員、資料でいうと下の方にあります、（新）ということで、「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」の担当教員、加配教員と密接に連携をしながら、実践校への伴走支援に取り組んでいくことを検討しているところでございます。

次に15ページをお願いいたします。最後にですね、実践校のネーミングについてでございます。前回御議論いただきましたけれども、ネーミングにつきましては、今後実践校が決まった後に実践校の子どもたちと一緒に考えて決めるといったことも想定はしておりますが、本日、ネーミング案であるとか、決め方に関してもアイデアがございましたら御意見いただければありがたいかなというふうに思っております。

次のページですが、おさらいですけれども、本日御議論いただきたいのは8ページから10

「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」検討会議（第2回）
（令和6年9月4日）

ページの資料でございます。よろしくお願いいたします。

最後になりますけども、17 ページ、今後のスケジュールです。この検討会議の最終回を9月26日、約3週間後ですけども、に予定をしております、まとまりましたら10月以降ですね、実際にこの募集を開始をしていきたいというふうに考えております。

事務局からの説明は以上でございます。よろしくお願いいたします。

（茅野座長）

御説明ありがとうございました。ただいまの事務局から御説明ありました事項について御質問はございますでしょうか。

（島谷構成員）

ちょっと用語の捉え方なんですけど、学校の仕組み変革って必須ですって要件とかにも出てきたんですけども、程度をどう捉えればよいでしょうか。

（石川係長）

これまで実証研究事業とかをやってきた中では、授業のやり方というかテクニックというところとちょっと言いすぎなんですけども、そういったものに着目してやってきたんですが、それだけでは学校はなかなか変わらないっていう問題意識から、例えばですけども、今もやってる学校があるんですが、校則を子どもたちが決めるとか、授業時数を小学校で変えるとか、ちょっと少し幅広に捉えていただきたいんですけども学校を大きく変えられるかとか、そういう問題意識を表現した言葉でございます。

（茅野座長）

続いて他に御質問いかがでしょうか。オンライン参加の早坂先生いかがですか。

～（音声トラブルにより調整）～

（茅野座長）

熊谷さんいかがですか。なかなか聞き取りにくかったということでございますけど、資料を見ていただいて、何か事前に御質問とかあれば出していただければと思いますが。

（熊谷構成員）

はい、ありがとうございます。特に資料の中では質問等ございませんので大丈夫です。

（茅野座長）

はい、ありがとうございます。それでは意見交換に入りたいと思います。

ただいま事務局から「一人ひとりに合った学び実践校」、仮称ではございますけど、①として目指す学校像、②として求める要件、③として県の支援、④としてネーミングと、以上4つについて御提案があったところでございます。

前回、主として①の目指す学校像に議論が集中しまして、②の求める要件ですとか、③の県の支援について、十分議論を深めることができなかつたかもしれません。また、④のネーミングについては、偏ったイメージになりはしないかという御懸念というか問題提起もいただいたところだったと思います。本日は、特に②の要件③の県の支援についてというお話がございましたので、こちらを中心に議論を深めていきたいなと思っております。とはいえ、①も多分に関わってくると思いますので、行ったり来たりしていただきながらと思っております。

それでは、御質問等も含めてどんなことでも構いませんので、④にいきなりということも多分ならないと思いますので、①から③のあたりに関わって議論していただければと思います。いかがでございますでしょうか。

（島谷構成員）

ありがとうございます。前回のふわふわした抽象的な議論を、事務局の皆様にごここまでまとめていただいて、本当に議論しやすくなったなというふうに感じています。6ページの山の絵なんていうのは、目指す方向性がクリアに見えていて、やっぱり県と市町村と現場の役割分担みたいところをクリアにして進めていくっていうのは、すごく大事だと思いました。

その上で私はですね、③の支援の在り方について、ちょっとコメントしたいなと思ってたんですけども、学校改革支援チームは本当に肝だと思っています。で、それと並行して加配なんですけれども、ちょっと学校には嫌われちゃうかもしれませんけども、加配をやりすぎることっていうのをどう考えるか、結局抜けると取組が止まるっていうことを、これまでの全国の学校がずっと繰り返してきたわけなので、やっぱり人の入れ方っていうのはよくよく考えた方がいいなっていうふうに思っています。

なので、学校改革支援チームが、学校とか市町村教育委員会に入っていくフォロー体制を、私は手厚くしていくべきだと思っています。で、この支援チームが大事にしてほしいのは、この支援チームが学校に対して何かを教えてあげる、こういうことやったらいん

じゃないかっていうのを言ってあげる立場ではなくて、教員の役割もコーチャーとかファシリテーターに変わるのであれば、それと同じ役割を指導主事とかそのチームのメンバーが果たすことが、すごく大事だと思っています。冒頭の教育長の御挨拶にもありましたけれども、やっぱりいちばん現場に近い人たちの主体性を奪わないようなやり方、彼らの試行錯誤を続けさせるとか。彼ら自身が自分の意志で改革をしていくっていう方向で持っていけるようなチームにする。それこそ本当に伴走だと思うんですね。その伴走の在り方を、どう組織立てて作っていくかっていうのがすごく大事になってくるので、学校に加配を入れるっていう今までのやり方というよりは、この支援チームがより現場に入っていけるような仕組みを作っていくっていうのが、私はすごく大事かなというふうに思いました。

（茅野座長）

ありがとうございます。今、③の学校改革支援チームについてお話をいただきました。せっかくですので関わっていかがでしょうか。

（早坂構成員）

よろしいでしょうか。今、島谷さんから御発言いただいたことに、私も心から賛同するところですよ。

ちょっと言い方を変えてお伝えできればというふうに思うんですが、何か新しい仕組みを導入しようとか、新しいやり方を取り入れてみようっていったときに、私たちがはまりがちな落とし穴みたいなものが、これまでの歴史の中から見取れるような気がするんですね。これは教育だけではなく、あらゆる分野において共通するのかなと思うんですけど、それは改革すべきポイントをピンポイントで絞ってそこだけを改革して、それ以外の部分を従前の仕組みや価値観のまま動かしてしまうってところ。これに落とし穴があるように思います。

もちろん世の中は複雑にできているので、全てを同時に変えることはできないにしても、少なくともピンポイントで変えようとする、今回で言えば学校教育の大いなる改革を目指すわけなので、それを支援する行政の在り方も含めて変えていかないと、結果的にやっぱり元に戻っちゃうんだと思うんですよ。

ちょっと平たい言い方をすれば、例えば学校教育の中でよく言われる物語に置き換えると、民主主義の理念を子どもに教えるときに、学校教育が民主主義的でなければ、子どもには当然民主主義の本質は伝わらないわけですよ。民主主義を口で言いながら、あらゆる

るものがトップダウンで降りてきて、一人ひとりが自主的、主体的に考えられる風土が学校の中になれば、民主主義は絵に書いた餅になるわけですね。

今回、我々の議論で学校教育の改革を進めようとしているときに肝になるのは、学校に「頑張れ頑張れ」って変わってもらうことはもちろん本丸なんですけれども、それを支援するときの在り方そのものも書き換えていかないと。つまり子どもに対して先生が一方的に教えるというやり方をやめて、子ども一人ひとりに合わせたやり方に伴走しようとするのであれば、当然行政の支援もそのような形になっていないと、本質的には改革すべき本丸そのものの改革が、逆に周りが変わらないことによって引き戻されてしまうことが起きるかなというふうに思います。ということで、ちょっと言い方を変えただけですが、基本的に島谷さんと言われたこと、賛同するという点でございました。以上でございます。

（茅野座長）

ありがとうございます。子どもの学び、それを教える先生たち、さらにその先生たちをサポートする行政と重層化している中で、それぞれが変わっていくということを御指摘いただいているかなというふうに思います。続いていかがでしょうか。

（武田教育長）

今の話なんですけどもね。今の島谷さんおっしゃるように、加配を学校に入れると、学校って基本的に薄めて使うんですね。で、ずっと言われてるのは、例えば不登校の子どもさんが多いから不登校支援の加配を入れました。そうすると成果が出て、その学校で不登校の子どもたちが減ってくると、加配を取られるわけですね。成果を上げると取られる加配っていうのが、学校にとってどうなのか、成果を出すと人が減るのねっていうね。

でもこれ、文科省の問題ですよ、どっちかって言うとね。それで私たちが今これで考えている加配っていうのは、学校の外に置きたいと思っていて、できたら市町村教委に置きたいっていうふうに思っています。ただ、文科省の加配定数の中には、市町村教委に入れられる加配の付け方っていうのが、現状ないんですよ。今の話の中で、やはり国の方も、その政策課題について、もう少し都道府県教委で自由になるような加配の付け方をしてくださいというのは要望してるんだけど、でもできる範囲でそれをやっていきたい。で、加配をずっとつけてきたけど、結局今言ったように学校につけてもなかなか成果が出ないというのは、私たちが十分に分かっているところで、市町村教委につける、でその市町村教委につけた加配と県教委の指導主事が連携して進めていくことが大事だと思うんで、そんな学校改革支援チームを考えています。

で、今の早坂先生や島谷先生の話はおっしゃる通りで、学校に「変われ変われ」って言うてるのに、依然として変わっていかないのが教育行政だっていうのを、私も本当に思っています。やっぱり教育事務所の指導主事の在り方も含めて変えていくことも一緒にやっていくということなんだけど、ただ現状はね、市町村教委の方が今までと同じように支援してくれみたいな要望がやっぱりあるので、どこまで変えていけるかっていうのはあるんですけど。基本としては今までの、指導する指導主事から伴走型に変えていくっていうのは大きな方向として考えています。

（茅野座長）

ありがとうございます。教育長の発言も踏まえていかがですかね。続けてありますでしょうか。

（熊谷構成員）

支援に関して、学校教育だけではなく例えば民間の企業であっても、同じ組織の中で何か大きな変化とか変革を目指していくというところにおいて、同じ組織内だけだとなかなか難しい部分もあると思うんですね。そうした中では、やはり違う立場の方々が少し入りながらやっていくことで変革ができると思います。また、強いチームをつくっていく中においては、やはり目指すべきゴールというものがどのようなものが大事。今回は、「一人ひとりにあった学びの実践校」というところがゴールなのか、さらにはもっと違う、わかりやすい具体的なゴールがいいのか。

ただこのゴールというものは、子ども中心に動いてるような気がいたします。子どもまんなか、これはとても重要なんですが、子どもたちが自発的にやっていく中で、教職員の皆さんも地域の方も保護者もいろいろ含めて我々大人が、生き生きと楽しみながら子どもたちに関わるということが、とても重要なと僕は思っているんですね。

円卓会議のメッセージの中には、“我々地球市民”という言葉が入っていたかと思いますが、今回のこの「一人ひとりにあった学び実践校」、もちろん子どもに焦点は当てていくんですが、じゃあ先生方は、学校は、地域の大人は、保護者は、っていう視点が入ってこないと、何て言うのかな、自己肯定感ってこの前お話ししたんですが、そのカリキュラム、プロセスも重要なんですが、プロセスの中には必ず大人が関わっていくんですね。やはり変革をするのであれば、先生や、企業だったり、保護者だったり、地域の人という大人がゴールを共有し、チームを編成するということが重要なというふうにした感じのところですよ。

（茅野座長）

ありがとうございます。子どもの主体性を発揮するのであれば、先生たちも主体性を発揮していただき、教育行政の皆さんも主体性を発揮していただき、という話になって、皆さんがやっぱり生き生きするということが大事、さらに、ここに地域の方たちも主体性を発揮するということですが、やっぱり地域を大事にしながら、教育に関わっていただき、そういう視点を大事にしたいなと思います。続いていかがでしょうか。

（島谷構成員）

伴走支援、このチームで頑張るといってもそうなんですけど、私もう1つ県ができることが、研修の部分だと思うんですね。今回手を挙げてもらえる市町村とか学校に頑張ってもらおうということはもちろん大事なんですけど、結局全県に広げたいっていうときに、ある意味、授業観とか子ども観を変えていくような方向性なわけなので、やっぱり研修そのものも研修観を変えていくっていうのは、私はすごい大事なことだと思っています。授業が一斉型でなくて、子ども主体で変えてほしいと願うのであれば、研修も何をインプットしたか、何を考えさせたかっていうような旧来の考え方から、子どもたちにこういう授業やってもらいたいっていうものを研修の中に再現できるような、そういうものでじわじわと。研修って本当にいろんな先生方が受けることになると思うので、そういうところから根っこからやっていく中で、今回手を挙げる地域、学校っていうものは、特別担当者を入れて頑張っていていただくわけですが、そういうところと並行して県として底上げしていくとか、その部分を変えていくっていうようなところはすごく大事ななと思いますし、県の最大の武器って研修だと思っているので、そこはぜひ並行してやっていったらいいのかなというふうに感じました。

（茅野座長）

ありがとうございます。県としてのサポート③のところに関わっての研修ですよ。続いていかがでしょうか。

（下山構成員）

ありがとうございます。今、梓組として大きい話になったんですけど、一方で子どもをまんなかっていることで、子どもたちにとってどうかなっているのを少し考えていました。そのときに、全体にも関わるようなことになると思うんですけど、例えば学校の仕組

みの改革で、子どもたち自身が学校のルールをつくるとか、こういうことってとっても大事だなあなんていうふうに思っています。学校の先生方やその子どもたちが実際に意見を言う場をつくっていくんだっていうような御提案が、ちょっと今見つけられないんですが、どこかに書いてあったような気がして、ぜひそういったやり方を進めてほしいなっていうふうに思っております。

なぜかって言うと、ここの最初の1回目でも話し合ったように、その不登校のお子さんたちが増えている状況にあって、その子たちが本当に多様な人たちなんですね。従来私たちが考えてたような、何かすごく静かにしたくて、傷付いた経験があってっていうお子さんもいれば、学びは苦手な部分があるけれどその他はすごく元気で、野外活動に行ったら生き生きしてるとか、様々なお子さんがいる。じゃあ、そういうお子さんの学びは何なのかっていうことを、やっぱり子どもたち自身から発するチャンスっていうことが、多様な学びっていうものを考えるときの大事な情報になるんじゃないかなって思ってたんですね。なので、従来の学びが合ったお子さんもいれば、私たちが考えるような教科教育じゃなくて、長野県が大事にしてきた自然とともに考えるような学びがすごく良いというお子さんもいる中で、子どもたちの意見を聞いてもらえる、もしくは先生方の全体の意見を聞いてもらえる機会をこれからつくってもらえるっていうのは、ぜひ進めていただきたいなと思っているところです。

（茅野座長）

子どもさんたちの意見を聞くって、直接的には今回のネーミングのところ少し関わる部分もありますよね。

（水野課長）

10 ページのところの要件、進め方のところに A～Eのうち、Bのところ少し書いてあるかなと思います。

（茅野座長）

ありがとうございます。今どちらかというところの県の支援について話が進んでおりますけど、いちばん最初に話題になった学校改革支援チームの話がございました、この御提案については、有識者の皆様いかがでしょうか。先程も少し議論が出ていましたけれど、今いくつかの意見が出てきたことを踏まえ、改めていかがでしょうか。

（早坂構成員）

よろしいでしょうか。今回の支援をベースにした県の取組まれようとしている姿は、非常に共感するところですし、冒頭で島谷さんの言われた山をイメージするって、やっぱり素敵ですよ。ゴールはあって、そこへのプロセスは実に多様で良いと。それをどう支援していくかってときの支援の在り方で、例えば学校現場に探究的な学びが導入されたときの現場の先生方の最初の戸惑いを思い出すと、何か参考になる点があるんじゃないかな、なんてことを考えながら、今このチームの支援のイメージを考えてたんですね。

どういうことかっていうと、要はこれまで学ぶ内容も学び方も教員の側から指定されていて、そこに子どもが乗かって学びが進んでいくっていう学びの在り方のそのものを転換させて、子どもの内側からやりたい、知りたい、解き明かしたいという内発的な動機に基づいた学びを先生が支援していくんだという方向になったときに、指導してはまずいので、子どもを引っ張ってはまずいので、見守らなきゃいけないんだけど、結果的に見てるだけで何もできなかったっていうね、現場の先生の嘆きを、私は上田市を中心にいろんな小・中・高等学校の先生方からお話を伺ったのを、ちょっと今思い出したんですね。

つまり、先程の冒頭の議論にもあったように、この支援チームがこれから変わっていくとする学校を支援しようとしたときに、何をすることが伴走することになるのかっていう、そのイメージは持っておかないと、チームをどう構成してもどれだけ多様に組み替えて新しい流れを作ろうとしても、その支援のイメージ自体にズレがあると、なかなかやっぱり難しいのかなというふうに思っていたりもしました。

では具体的にどうしたらいいんだろう、というところの1つヒントになるかなというふうにお話を伺っていて今思いついたのが、リーダーシップの種類でいくつかあるわけですけども、そのうちの1つにサーバントリーダーシップというのがあります。サーバントというのは、奉仕者ですよ。お手伝いとか御主人が別にいて、その御主人を徹底的にサポートして。そのときのサーバントになるリーダーが、きっと今回行政的な伴走支援に求められるんだろうなというふうに思っています。で、そのときの先程のBのところでしたかね、子どもの声を聞く、必ず地域と子どもを話し合いに加えるという項目が、進め方、要件のBのところに入っていて、地域も子どももやっぱり当然のことながら実に多様なので、多様な人たちに伴走しようとする、多様な人たちのサーバントになろうとすると、その支援する側があっちを立てればこっちが立たず、こっちを立てればあっちが立たず、結局どうしたらいいんだって、皆さんどうしてもなりがちですよ。

でもそのときに、限られた人的リソース、あるいは資金的なリソースの中で物事を進めていかなきゃいけないって制約を踏まえた上で考えるなら、やっぱり押さえておかないとい

けない理念っていうのは多分そんなに多くなくて、多分外せない理念の1つには、この多様な人々の価値観や考え方、ものの見方等に対しての共感力っていうところが多分、このチームにはいちばん求められるんだろなって思うんですね。

方向性は県として旗を示しつつ、つまり山頂の位置は示しつつ、そこに向かおうとする現場の苦労とか願いとか、できれば夢のようなポジティブなものに対して心を寄せていく。ただ単に相手の話を傾聴するっていうだけにとどまらず、相手の立場に立って、そのエンパシー、相手の靴を履くなんて言い方が一時期流行ったこともありましたけれども、相手の立場に立った共感っていうところ、その支援の理念のところをやっぱ大事な魂になってくるのかな。チームを考えると、やっぱり外せないものの1つになってくるのかな。それをサーバントリーダーシップというリーダーシップの類型をちょっと思い出したときに、共感という柱をもう1つやっぱ立てておく必要があるのかな。そんなふうに感じた次第です。

（茅野座長）

探究の文脈で、指導しちゃいけない、見守ってなきゃいけない、結局何もできなかったっていう話は、ちょっと意味深なところかなと、私自身は受け止めていまして。ちょっと言葉を悪く言うと、放任になってしまう可能性があるという部分かなと思っていて。

子どもたちが何か学びたい内容や方法を選んだ結果、それで終わりではなくて、その子どもたちが選んだ学びをちゃんと遂行できるように、先生たちは意図的、計画的に何をやるんですかってことが、本当は問われたはずだと思うんですね。そういう意味で先生が何もできなかったというのは、先生としての主体性はあまり発揮できなかったということになってしまうのかなと。というふうに思いながら、勝手にちょっと受け止めたこととお話しいたしました。

（下山構成員）

今のお話を聞いて少し整理されたところがあって、実際学校チームが変わらなきゃいけないっていう話と、子どもたちの意見を聞いてほしいっていうところをつなげると、何が引っかかってたかっていうと、要するに柔軟性が常になくなっていくっていうことが、問題を解決しにくい方向にいつも向かわせてたなっていうふうに思うんですね。

そういったときに、チームも今言ったような共感性ってすごく大事で、形がないようなもののような気がするんですけど、実際にはまずは共感してもらって、受け止めてもらって初めて進めるっていうことも多々あって、そういった力をもしチームの中でつくって

ただければ。目指す学校像みたいなのが揺るぎないゴールであって、そこに向かってみんな行きやすくなるんじゃないかなっていうふうに思いました。

で、サーバントリーダーシップって今初めて聞いたんですけど、私は割とコンサルテーションを行うことが多いんだけど、やっぱりそのコンサルタントの言うことを聞いてもらうんじゃないくて、コンサルティ、つまり相談をしてる方ですよ、されてる方の考えとか、理念をいかに実現していくかっていうのがコンサルタントの仕事なんですよ。それとすごく共通している部分があるな、普通のカウンセリングのような相談じゃなくて、このコンサルテーションとかそういったことも考えながら進めていただけるといいのかなというふうに思いました。

とにかく、その子どもも先生も学校も教育委員会も、柔軟性っていうのをいかに確保できるのが大事かなっていうふうに話聞きながら思いました。

（武田教育長）

その柔軟性は分かるんだけど、山には登らなきゃいけないでしょ。山に登らないっていう柔軟性も認めていくのか。行政って目標があって、それにどこまで行ってるかみたいな、常にこの成果と効果みたいなことを求められるじゃないですか。そして今の共感力とか柔軟性といったときに、今年1年はほとんど上らなかったと、そういったところをどういうふうに認めていくか。

（早坂構成員）

武田教育長、ごもっともだなと思って今お話伺っていたんですが、せっかく今武田先生にも御発言いただけたんで、ちょっと武田先生絡みで今のお話に私なりの意見を述べさせていただきます。

おっしゃる通り、あらゆる柔軟性、あらゆる自由、あらゆるものに共感を示していくのってかかっていうところが、こういった柔軟性や共感の議論のときには批判として生じるものだし、そこにはちゃんと答えていかなきゃいけないんだろうなっていうふうに私も思っているところなんです。で、共感や自発性、自立性あるいは最終的に目指すのが、子どもが自立的に学んでいく学習者になっていくんだと。学校を卒業した後も自分の人生を自分で切り開いていける子どもにしていくんだってところに狙いがあるんだとすると、山に登らない人のけつを蹴って登らせるっていう方策は、やっぱり取れないんですよ。その学校を卒業した後もけつを蹴り続けられるかっていうと、それは無理なので、自分で歩いていってもらわなきゃいけない。

だとしたら、今いる中で、自分で歩いていける学校、自分で行ける、歩いていける子どもを育てるには何が必要なのかっていうところで、学び円卓会議の知事と教育長の共同宣言が、やっぱり私は核だと思うんですよね。あそこに夢が語られてるじゃないですか。あの夢が、私は昨日も別の会議で武田先生と御一緒させていただいて、今日の会議に向けて、改めて共同宣言を読ませていただいたときに、人って自分で歩いて行きたくなる方向ってのは、やっぱり生き物としてあるんだと思うんですよね。で、人を惹きつけるすごく大きな力って、目の前にぶら下げたニンジンではなくて、夢なんだと思うんですよ。こうしていきたいという願いだと思うんです。それを今回、知事と教育長が共同で出されたっていうことが究極に大事で。あそこはやっぱり繰り返し繰り返し、現場の皆さんには伝えていくっていう、で、その夢をお2人には堅持していただく。そこに強いやっぱりリーダーシップは持っていただきつつ、歩くのは現場ですよ。歩かないところには歩かないなり理由があるんだと思うので、そこはけつを蹴るという方向性より、やっぱり共感。先程お話が出たように、カウンセリングの手法で、何がその歩みを止めているのか、しっかり聞いていただくというところに県の伴走支援があってしかるべきかな。そんなふうに私は思いました。以上でした。

（下山構成員）

いつの時点でゴールしなきゃいけないのかって、常に考えてるんです。80歳くらいまで生きるとして、学校教育の中にいると、この時代だけでゴールしなきゃいけないって思いが常にあるような気がして。私は割と福祉の現場にも行くから、学校終わった後の人生の方がよほど長い。そういう中で、じゃあゴールは、ちょっとここで目指すゴールとは違いかもしれないんだけど。でもやっぱりなんていうのかな、学校行けない子とか、引きこもりになってる人たちとか、勉強うまくいなくて傷付いている子どもたちを見ると、そのゴールっていうのが、ここの時期に絶対全員がそうしなきゃいけないって言われたときの苦しみとかを考えると、長い人生で本人がいつかゴールが見つかって、そこを目指して自ら歩いていくことを支えていたり、教育していく。それを待って、信じて待つっていうのが教育の大事な行方かなっていうふうにも思っていて。ごめんなさいね。なんか一方的ですごく優しさだけを全面に出しているかもしれないんだけど。

（武田教育長）

行政職の教育次長に話っていたきたいんだけど、行政の理論の中で「信じてます」ってあるんですか。

（米沢次長）

私、教育者じゃないので傍観してしちゃったんですけど、もし発言を許してもらえらな
ら、今の議論は噛み合ってなくて。なぜかという、学校のゴールを今議論している中
で、学校の中に子どものゴールの多様性を認めていこうとしている我々に対し、学校にゴ
ールを求めないでください、っていうのは、ちょっと議論がかみ合っていないと、私は傍観
して聞いてました。

で、我々が求めている、この会議の中でぜひ結論をつけてほしいのは、学校の多様性を
いかに認めていただきながら、ゴールを目指していくその市町村教委であり学校は、様々
な方法論を持ちうるんだと、それを持ちうる時に、我々は何をしてあげたらいいかって
ところ。だから、先生がおっしゃるように、「子どもたちの多様性を認めた学校を創りた
いんだ」をゴールにしてほしいんですよ。そのゴールについて、子どもたちは多様なゴ
ールを設定していいというふうにしていきたい。そのために我々はどうしたらいいですか
という議論を今しているの、学校の中の目標値を今ここで語っても、若干しょうがないか
なっていう気がしてるんですね。

なのでちょっと答えになってませんが、議論を前に進めるとしたら、学校はどうある
べきかを前回議論していただき、目指す学校像が少しずつ固まってきましたので、この学
校像に向けてゴールは様々あるけれども、1つの目指す方向は学校で決めなきゃいけない
として、それに対してどうアプローチをしていったり、どんな目標を立てたりっていうの
を、決めてもらえるといいのかなということ、これから先の議論の中で、我々に対して
示していただけるといいなというふうに思います。

今の教育長からの問いかけに対する答えは、それは待ちもあるんじゃないかと思いま
す。ただ、我々には、県民の皆さんに対して、サービスを、行政のサービスを提供してい
かなきゃいけないという使命があるので、そのときに相手方が求めてないものまでやる必
要はないという意味で、少し引くこともありますよね。一方で行政としてやらなきゃいけ
ないことを目標として定めていかなきゃいけないときもあるので、そのときはやらなきゃ
いけないことを嫌がられてもやらなきゃ、その両方。答えになってないですけど、ただ、
議論はそこじゃないんじゃないかって。

（島谷構成員）

県の立場でやっている議論ですし、組織全体としてどこを目指して行ってここだけは落

としちゃいけないっていうテーブルがあって。今下山先生おっしゃった話はすごく大事な話なんですけど、議論の中では多分、そこは学校単位でしっかり考えていく話で、そこに対して柔軟性は当然認められる世界だと思うので、やっぱりここだけの、このビジョンだけ絶対ぶらさずにただ登り方に柔軟性をしっかり認めていって、その試行錯誤を許す。そして、それを支援できる学校改革支援センターチームであるためのやり方を、考えていくってことかなっていうふうに思います。

加賀市でも伴走チームを付けて学びの改革を進めているんですけども、早坂先生のおっしゃった通り、もう本当にサーバントのところなんですね。うちとして、ビジョン、授業を変えるっていうところは、市民の皆さん方とのお約束なので、そこをやり遂げる。そのために現場の主体性を奪わないような伴走、問い返して問い返してどこに向かわせるのかっていうのを、彼らの主体性のもとやっていくっていう伴走力が、やっぱ試される場所なので、そこは両立できる場所なんだと思うんです。学校の主体性を奪わずにいても、行政として目指すべきところを目指していくってというのは。

だからこそこの支援チームの力量が本当に問われて、もう彼らがどれぐらい同じ温度感で向かえるのかっていうのが肝だになっていうふうに思ってます。

（米沢次長）

学校がマストじゃないってことを否定したくない。要は、今は学校をどうしていったら多様な子に受け入れ場所をつくれるのかを議論したいので、学校以外のところに学校の代わりをしていく議論をする前に、まず学校を変えることによって、学校が苦手な子が学校に行きたくなる、笑顔で行きたくなるようにいかに仕向けられるかをここで議論したくて。

なのでちょっと言葉強いですけど、変革、システムというか、仕組みの変革、要は学校自体が変わらないと、当然子どもたちにそれを分かってもらえないし、来たくなくなる子はそのまま来たくなくなってしまうのではないかということになっちゃうので。

学校って存在を何とか変えて、いろんな子を受け入れられるようにするための学校を創るために、おっしゃっていただいたように、その議論を進めていきたいと。さっきの私の発言は、ちょっと言葉足らずだったと思います。

（下山構成員）

ありがとうございます。こうやって丁寧に説明していただくと、すごく分かりやすく、何を目立たせなきゃいけないのかっていうところが、私もずれていたところがあって

申し訳ないなって思っ。今言っていたように、学校が楽しくなるって、本当に誰もが望んでいることで、期待されてることは確かで、それは確かに、目指すゴールだろうなっていうのが揺るぎない部分で。私も説明下手でごめんなさい。その柔軟性っていうものが、そのゴールに柔軟性ではなくて、在り方への柔軟性、どうしても硬直化してしまっ、新しいことを入れると、このやり方でしっかりやらないといけないんだ、っていうふうになる、まずそこへの柔軟性をどうにかしたいなっていう気持ちが強い部分ではあります。

でもそのために、一生懸命先生方は学校の中でやられて、子どもたちの力や育ちっていうのをすごく期待していて、この方法がいいんじゃないかってやられてることに対して、新しいものが来ると否定されたかなっていう気持ちの中で、やっぱりスタートを切りにくい部分があって、そこに対してその共感性とか、柔軟性っていうものが発揮できるっていうのかなっていうふうに考えました。

（茅野座長）

武田先生から「山に登らないわけにはいかないでしょ」って話があったので、ちょっと私の立場で発言をすると、議論を少し分けなければいけないかなと思っいて。

早坂先生から探究の話があったんですけど、探究の場合って、学ぶ内容ですとか、その方法、子ども自身がそれを学ぶ、達成する方法は、割と選択肢がいろいろあるような気がするんです。それは別の言い方をすれば、何らかの社会的なテーマとかを主題としながら学ぶ内容を構成、組織していくという文脈になるかと思っいます。

一方、私は算数・数学教育の人間ですので、ある意味公教育としては少なくともこういう内容は学んでほしいってことはすでにあっ、そこに提示されているものを学ばなくてもよいという選択肢は、ちょっと取りづら。教科というものは、そもそも知識や技能、あるいはものの見方や考え方っていうものを、子どもたちに義務教育として、あるいは公教育として身につけてほしいという内容を分類整理し、系統立てて組織立てたものだという認識なので、そういう知識なんかは、子どもたちが自分の意志で選べるって言われちゃうと、ちょっと難しいかなと思っいます。

そのときには、学ぶ内容はそうかもしれないんだけど、学ぶ方法自身は子どもたちが自由に柔軟性を持ってやれることも必要でしょうし、先程ちょっと言っように、子どもが何か学ぶ内容とか方法を選べたからおしまいでなくて、本当は選んだ後の方が先生たちの指導が大事で、それを子どもたちがちゃんと遂行できるように、じゃあ先生たち何するんですかっていうところが問われているので、そのことをちゃんとこのサポートの方ではアドバイスをしたり、伴走したりしながら適宜バックアップしていくのかなっていうふうに

受け止めました。

（武田教育長）

この間、文部科学省の方が説明してくれて、その中で事例として挙げてきたのが、ある小学校のある時間のことなんです。ある子は算数の復習やっています。ある子は家庭科の設計図を書いています。ある子は自分の学びたいことを何かやっています。っていう時間で、この子たちはそれぞれのやり方で自分たちの学習をしていますねっていう説明で終わったんだけど、よくよく考えたとき、「あれ、この時間って何の時間でいわゆる時間数としてカウントするんだろう」ということなんです。だって、そのときにその子は家庭科をやるか算数やるかなんて、分かんないわけじゃないですか。そうするとその時間を35時間の中に入れるのかな。入れるとすると年度当初の計画の段階で、この子が家庭科をやるって予想できないわけだから、年度当初は35時間家庭科やるけどその他の時間に家庭科やる時間をつくりますってなったら、余分に授業やることになって、結果先生たちの授業時数は増えるわけじゃないですか。結局そういう問題に、これからこの学校ってぶち当たっていくわけなんです。ある小学校で45分授業を40分になると、5分ずつ浮いてくるので、子どもたちがいろんなことを探究できる時間にしようって言ったなら、先生たちは「この時間は何の時間でカウントするんですか」という話になるんですよ。

で、そういったことをこの学校はどうクリアしていくかっていうことが問題になってきて、学習指導要領の中でやるとなると、どういうふうにやっていくのっていうところの問題を、どういうふうに解決していくか。学習指導要領を超えないわけでしょ。でも今みたいな、先生たちが国語の教科書開いたから国語の授業ですみたいなカウントしていくとすると、時数が増えていくわけですよ、単純に。

（島谷構成員）

方法論はいくつかあって、例えば複数教科でこの時間何選んでもいいよっていうのは、ある程度縛りをかけているはずなんです。この1週間で、例えば算数国語社会で、この単元をこの1週間でやるっていう中で進度を渡しているっていうような形だと思うので、ある程度のその単元の塊とかゴールは、必ず設定しているはずなんです。ここまでの範囲で必ず区切る。区切らない限り絶対にできない話なので、そうすると事前に計画できる。学習指導要領の中でできる。

ただ、まあ何でも自由にやると結構教員側の見取りが大変になるので、何を狙っていくかだと思っていて、例えば加賀市の場合は、石川県は教科教育がすごく強いので、自由っ

である意味教員側の不確実性なんですよね。なので、割とそこへの恐れが非常に強くって、1つの教科の単元を深めていくっていう方向で子どもに自由を渡している傾向が強いんですね。

なので、単元の中でゴール、つけたい力、ここに必ず向かっていくよっていうのは、子どもと必ず共有をした上で進度を渡す、いろんな登り方していいよと言って渡しているの、そこは今の学習指導要領の中でもできないことはないと思います。

ただ、それを超えてまでやれる方策をみんな持っているのかっていうと、無理に超えることを求めるよりは今の枠内で「それだったらできるな」って現場が思えるところをアシストしていった方が、まず1歩目としてはいいのかなっていう気はします。

何だろう、自由にやらせりゃいいってもんでもないので、やっぱりやらなきゃいけないこと、つけてほしい力は、おっしゃる通りそこはあるので、その中で自由度、我々にとっての不確実性をどこまで許容できるのかっていうところだと思います。

（武田教育長）

その問題が、さっき早坂先生おっしゃった夢の問題とも関係するんだけど、どこまで自分たちに自由が与えられてどこまでやれるかっていうのは、やっぱり夢の話と関係するんですね。

（早坂構成員）

よろしいですか。今のお2人のやり取りを伺っていて、ちょっとカリキュラム論のお話が頭に浮かんだんですね。教育は、当然作為的な営みなので、狙いがあって、目的があって、そのための手段内容が決まっていって、っていうカリキュラムの計画性っていうのがあるわけですが、一方でこの計画性にあまりにも傾倒しすぎると、子どもたちの主体性とか自立性って完全に奪われてしまうわけですね。

鳥で言えば口を開けて、与えられるだけどんどん餌を突っ込まれるような状態。ペンギンが魚を食わされているのと似ていますよね。本来であれば自分で飛べるようになって、自分で泳いで取っていかなくちゃいけないもの。それをいつまでも大人になっても与え続けると、やっぱり自分で取りに行くことを忘れちゃいますので、あるいは取りたい、取れるんだっていう発想すら浮かばなくなるので、カリキュラムの計画性は計画性が大事、つまりやるべきことをやるんだということをしっかりやる仕組みとしてカリキュラムの計画性がある一方で、子どもに自立とか自主性を持たせなくちゃいけない。その理論的な背景はどこにあるのかっていうと、すごくシンプルで学びの創発性の部分、要は計画性と対をなす部

分ですよ。学んでいくと、当初学ぼうと思っていたこととは関係のないことがすごく面白くなったり、開いた扉の先にゴールがあるはずだったんだけど、開く行為そのものが面白くなったりとか、要は付随的に発生するその場その場での人とのつながりや、教材や教育のやり取り、地域とのやり取りの中で生まれる、コントロールしきれない部分、計画しきれない部分の創発性っていうところをやっぱ忘れちゃいけないんだと思うんですね。

つまり、山に登らせる議論と夢っていうのは、やらなきゃいけないことと夢っていうのは、島谷さんが言われたように、これ絶対両立するはずですよ。つまり計画性がなければ創発もないし、創発だけ狙っても何も生まれなくていいこともあるので、やっぱこうバランスを取りながらで、ただそのバランスを取るときにリーダーにお願いしたいのは、やっぱり夢なんですよ。現実可能な方法とか手段とかやり方じゃなくて、それはもう行政の方にプロがいるわけなので、それはそっちへおまかせをして、トップにいる方はもうひたすら夢の旗を振っていただきたい。創発の方に振り切っていただきたい。なんかそんなふうに思います。以上でございます。

（茅野座長）

ありがとうございます。計画したことだけ評価するのではなく、もうちょっと広く、実際子どもたちが何を学んだのか、何が実現できたのかっていうのを、今、創発性という話もありましたけど、そういう目で見ていくってことはやっぱり大事なことですよね。

一方で、途中で話がございましたけど、創発性だけ狙っていくってことはなかなか難しいのでバランスという話もありましたけど、やっぱりその、バランスは難しいですよ。でも忘れちゃいけないんですよ。どっちかだけっていう議論にしないってことが重要なポイントかなというふうに思いました。

（島谷構成員）

ただ、戻る慣性って、すごい強いんです。現場はやっぱり旧来の、長年続いてきた方に戻る慣性の方が断然強いので、教育長はじめ、トップの方は、ひたすらもう旗を振り続けるっていうのは、やっぱりすごく大事なことです。もう心配しなくても戻りますから。ちょっと行きすぎちゃったとか思ってもすぐ戻るんで、本当に。だから、そこはやっぱりブレずに、あの早坂先生おっしゃる通り振り続けるのは大事なことです。

（武田教育長）

加配に少し関係するんですけど、校長とか教頭とか、その学校の中核のリーダーになる方

は、やっぱり長期に置いた方がいいか、どう思います。

（島谷構成員）

うちの場合は、市内全校で同じことやってるので異動に耐えられるんですけども、やっぱり教頭校長や、うん、主任層、研究主主任とかの中心になってる人たちは、3年4年、そうですね、育てながらやっていくってことを考えると、そんなすぐに動かすと結構難しいかなって感じがします。ちゃんと育て切るってところを考えると、ある程度は必要かなと。

（茅野座長）

それがもしかしたらこの御提案の中にあつた、学校のシステムを変えるっていう部分のある意味一部というか。

（武田教育長）

学校のシステムについてはさっき説明した通りだけど、どちらかというと教育委員会のシステムですよ、人事とか。

（茅野座長）

これは、保護者の立場から、熊谷さん、保護者として学校に関わったり、地域の一員として学校に関わったりするときに、校長先生、教頭先生、あるいはこういう教科主任、研究主任っていうような話もありましたけど、そういう層が短期で変わっちゃうとかっていう話についてはいかがででしょうか。

（熊谷構成員）

今回の学校改革する中では、1年や2年で変わってしまうっていうのは少し、やはり関わる中で中途半端にこの改革が進んでいってしまうのかなという懸念はございます。

やはり3年なり5年ぐらいという部分が重要なのかなとも思いますし、それぞれの学校で手を挙げていただいてやっていくということですから、全体のビジョンがありながらもその学校が目指すべき「一人ひとりに合った学校」というのを、いかに創り上げてリーダーとして続けながら関われる者が必要なんだと思います。

私は教育行政とか、またはカリキュラム的なテクニカルなことはちょっと分かりませんが、やはり先程冒頭ちょっとお話しした通り、学校教育の関係者だけではなくて、そこ

に保護者が入る、またはコミュニティスクールと直結しながら地域の人が入る、まちづくりの委員会の方々が入る、こんなようなことでその学校が目指すべきところを共有しながら創り上げていくってところがとても重要なのかなと思うんですね。

学校だけでも解決できるわけではなく、保護者の理解も重要ですし、上から降りてきたものがあるって保護者は何をやるのか分からない状況の中で、学校だけが教育委員会だけが主導で何か進んでいくっていうのはちょっと。やはり全体のチームとして、保護者や地域も含めた中で、チームとして新しい改革に臨んでくってというような支援イメージをつくり上げていただければ、とてもいいのかなと思ってます。

さらにその段階から、子どもたちの意見を入れていく。民間企業でもそうなんだけど、内部だけでやろうと思っても、改革なんてなかなかうまくいかないんですね。外部の人間がいた方がいいってことを冒頭でもお話したけど、子どもの意見を聞くっていう部分も、また違う気づき、学びにもなるということですね。学校創りですから、ぜひとも児童会、生徒会とかも含めた中で関わっていくことが、手を上げてくれる学校、それぞれの地域性特性を活かしながら、そこにしかない1つのチームとして山登りすることの良いスタイルができるのかなと思っております。

ですので、ある程度の期間というものは、チームの構成としては必要ではないかなと感じています。

（茅野座長）

ありがとうございます。地域の方とのコミュニケーションを密にするためにも、一定の期間をという話だったのかなというふうに思います。

③の方から入ってきたんですけど、②の実践校の進め方の話も今出てきてるかなと。とりわけ、今熊谷さんにお話いただいたのは、10ページですかね。実践校での進め方で言えばCの辺りですが、先程もお話があったように、当事者である子ども自身の意見も伺ったらどうかというと、Bの辺りの話もあるのかなというふうに思いました。

続いていかがでしょうか。少し切り口を変えて、②の方も見ていただくと、また③の方のイメージも豊かになるかなというふうに思うんですけど。

（島谷構成員）

10ページの要件っていうのは、手上げをするにあたっての要件ということですよ。イメージとしてはそうですよね。まずAから見ると、「仕組みの改革何ぞや」ってなっていて、読み進めていくと「こういうことなんですね」ってなります。と、こうやって見てい

くと、Eとかすごい細かいなと思っていて。なんかこう、その際の案内役云々っていうのは、子どもの主体性でも何でもないと思うので、なんかちょっと粒度をもう少し、ABC Dぐらいまでは許容できるとして、実際公開もやってもらった方が私もいいと思いますけど、なんかあんまりこう方法論を縛らない方がいいかなっていう気はするので、なんかそんな感じで思いました。

（茅野座長）

ありがとうございます。粒度という話がありますが、解像度をどのレベルに置くのかっていう、先ほどの武田先生の話の中でも、1時間1時間くらいの授業レベルで考え出すと色々課題が出てきて、ざっくり教育って一括りにしてる時はなんとなくみんな「いいよいいよ」って思うんだけど、教育って授業だけじゃないと思うんだけど、授業のことを考えれば1時間1時間の授業が、本当の意味で累積されない限り、教育の成果って本当は生まれないはずなので、どのレベルで考えるかっていうのは結構大事なポイントかなというふうに思いました。

Eは、少しそういう意味では、もしかしたらBを考える中で、子どもたちが「私たちがやりたいです」とかってなってくれたら、Eみたいな形になってくると、とってもいいかなんていうふうに個人的には思いました。

ありがとうございます。今、島谷さんの方から要件のABCDEの話がございましたけど、続いて委員の皆様いかがでしょうか。

（早坂構成員）

よろしいでしょうか。あの進め方のDですね、実施プロセスと成果をまとめていうところ、この「成果」、要は評価について、ぜひ御一考いただきたいなって思ってたことが1つあります。

子どもの多様な学びを実現する多様な学校を県として支援していこうとしたときには、当然ゴールは同じなわけです。けれども、進み方、1合目から2合目までにすごく時間をかけたい学校もあるでしょうし、3合目まではバスで行っちゃって、4合目から頑張っていこうというタイプの学校もきっとあるんだと思うんですね。

つまり、この成果を何らかのKPI基準に照らし合わせて評価成果を明らかにしていこうとするプロセスは、おそらく相対評価はなじまないんだろうなって思うんですね。学校それぞれの願いや狙いをしっかり聞き取っていただいて、県が示すゴールと学校が願っている願いや思いここをうまく合致させる形で、例えば去年よりもこの学校については、例

えばこれまで子どもが意思決定の場に参加できてなかった学校が参加できたということであれば、その学校としては絶対評価できるポイントだと思うんですね。

この絶対評価の部分が認められずに、おしなべて学校が同一の基準で評価されるようなことになると、遅れている学校、進んでいる学校みたいなことが生まれかねないなって。そのゴールには当然みんなたどり着いてもらうにしても、そこへのプロセスを各学校にやはり委ね、そこを徹底的に支援していくって方向なので、この成果っていうところをどう出していくのかってことについては、ぜひそれぞれの学校の在り方、そこにしっかりと根ざした形の成果を表出できると良いのかなというふうに感じている次第でございます。

（茅野座長）

ありがとうございます。この場面での成果という言葉が、どういう意味合いで現場の方に伝わっていくのかに気を遣わないと、違う方に行っちゃうかもしれないということですよ。続いていかがでしょうか。

（下山構成員）

学校からしたら、評価の最終年度が大変だっていう気持ちがあるかなって思ったときに、その評価、つまり目指す学校像がある程度こちらで提案されてる状態ですよ。ただ、これはどういう観点で評価できるのかなっていうのは、考えないといけない部分はすごくあるかなと思っています。どうしても、今言ったような相対評価の方がやりやすいからそうなっちゃうんだけど、学校の方でやっぱりこうプロセス、計画とかを立てていただければ、学校の中で自分たちの評価をしていただくというような方法だったらできるんじゃないかなっていうふうに思った次第です。

で、なんかやっぱり無理やり子どもに「好きですか？楽しいですか？」と問う学校アンケートみたいな感じで、「はい、いいえ」みたいな感じになっちゃうと、やっぱり硬直化しちゃう状態。もちろん数値的なものは出して分かりやすく表現するのと共に、質的に子どもたちや学校の様子から成果を表現していただきたいな、というふうにすごく感じているところです。

（茅野座長）

ありがとうございます。今関わって、楽しいという話がありましたので。私たちが研究上アンケートを取ったりすることがあるんですけど、例えば「学校は楽しいですか？」っていうのは、“学校”とざっくり聞きますよね。でも、もし授業改善っていうことを考え

るんであれば、例えば我々からすれば、「算数の授業楽しいですか？」って言われても、あんまり役に立たないかなって。ちょっとくちはばったい言い方になるんですけど、算数のどんなことが楽しかったのかって本当は我々は聞きたいのかなって。算数のこの内容、例えば $13 - 9$ みたいなくり下がり引き算でもいいんですけど、そういうものを学ぶときに、こういうふうに学んだから、それが楽しかったですって言ってくれと、それは我々にとっては子どもからのすごく貴重なフィードバックなんですけど、ざっくり算数が楽しかったですと言われても、授業改善っていうレベルでいくと、「そうね」っていうしかないなって思うところもあって。先程の粒度という話とも関わってくるんですけど、やっぱり気にしたいなというふうにちょっと思っていました。

（下山構成員）

量的な感じだけじゃなくて、質的なところを取りたい。

（武田教育長）

ただ、今、学校評価というのはそうなるんですよ。学校楽しいですか？授業楽しいですか？とか。このことについてはもうちょっと考えていかなきゃいけないということですけどね。

ちょっと話を変えていいですか。下山先生に特に聞きたいんですけど、Bのところなんですけど、地域を忘れちゃいけないって、熊谷さんがおっしゃってくれたことでもあるんですけど、私個人的にはですね、やっぱり学校の仕組みを変えるっていうことの中に、子どもたちも学校運営に参画するような学校になってほしいというのがあるんです。

準備の段階においても子どもを話し合いに加えるんですけど、多分これをそのまま学校に持っていくと、この話し合いに参画してくるのは、例えば児童会とか学級長とかになるわけじゃないですか。

で、ここで変えていきたい学校っていうのは、背景は不登校傾向の子どもさんとか学校に足が向かない、来れない。あるいは集団の中に入れない。あるいは授業についていけない、そういう子どもさんたちが、どういうふうにその中で自己実現できるかっていうことを目指していくわけですよ。

そうすると、この準備段階においても、そういう子どもたちも参画できるような、っていうことを考えていかなきゃいけないと思ってるんですけど、どういうふうにして、そういう子たちの声なり思いを聞いていくっていうことができるのかな、というのを、ちょっとお聞きしたいんですけど。

（下山構成員）

本当、大賛成です。できること何でもします。今言ったようなお子さんたちが、例えばこういうような場とか、みんなが行くようなところに来て急に発言できるかっていうと、できる子もいるんですよ。本番に強い子がいるんだけど、そういう子は、公の場で発言するいい機会だからぜひ参画してほしいのと、一方で、思いはあるんだけど表現できない子もたくさんいて。以前不登校のお子さんに関わって、こんな学校がよかったなっていう手紙をもらったことがあるんですよ。すごくいっぱい書いてあるんですよ。その子、小学校3年生ぐらいの子だったんだけど、思いがたくさんあって、これ実現したら確かにいい学校だわって思えたんですよ。先生が教えるだけじゃなくて、失敗したりしながらも、子どもと一緒に楽しみを伝えてくれたらいいのにな、とかね。いろんないいことが書いてある。

だからぜひともそのお子さんと繋がってる方を中心に、何でもいいんですよ、書いて文字でも手紙でもいいし、もしかしたら絵でもいいのかもしれないし、日々そういったことを、改めてお願いしてもいいですし、日々書いてる子があれば、そういったものを提供してもらえる機会っていうのを、ぜひつくっていただけるといいなっていうふうに思っています。

（島谷構成員）

小・中で発達段階違うので、その話し合いの参画の仕方、レベル感もだいぶ違うと思うんですけど、例えば小学生の場合に、「これからこういう学校を創りたい」とかみんなで話し合おうって言ったって、絶対無理なんですよ。

加賀市でやっていたのはですね、子どもって今の一斉授業、子どもは“手を上げる授業”という表現をするんですけど、あれに対して疑いがないわけです。ずっとそれでやっていたわけなので、それで改めて変わった授業をやったことで初めて、「あ、こういうこと」、「すごく自分にいいな」というのに初めて気付けるわけなので、小さい希望をちょっとずつ実現してあげることが、結構大事だなと思っているんですね。

例えば空間の自由度を与えてあげて、教室だと狭いと子どもが言い始めると。で、隣の部屋も使いたい。けども自分は一人で集中したいから、ちょっとこう囲われてるスペースが欲しいとか。そういう細かい声を、実現してあげることによって、割とその個々のそういうニーズも叶えさせてあげるような仕組みってできるかなと思っているんですね。なので、そのビジョンと一緒に考えるのは、児童会の代表の子、ほんといい子が考えるって

ことはできるかもしれないですけども、やっぱり大事なのは、下山先生おっしゃるように、そこから先の細部のところの設計に子どもが関わるといことの方が、子どもの実感値としてもやっぱりすごく大きいところになるので、そういうところがすごく大事ななと思います。

地域はまたちょっと粒度が違って、全体の方向感で押しってもらうとか、反対する力をうまく間に入ってなだめてもらうとか、継続していくためには地域にとにかく望まれないと学校が継続していかないと思うので、地域と子どもの入り方の程度はだいぶ違うかなという感触は持っています。

（茅野座長）

やっぱり途中でも議論になりましたけど、やり方は一律にはいなくて学校なら学校ですし、地域、地域群だったら地域の中で考えなきゃいけないし、っていうところもあると思いますね。いかがでしょうか。続いて、早坂先生、熊谷さんいかがですか。

（早坂構成員）

それじゃあ関連して、ひとつよろしいでしょうか。子どもも学校の運営に参画させたいという武田教育長の発言は、私も先生も言われたように心から共感するポイントだなというふうに思っています。

で、実際に子どもを意思決定の場に参画させたときに、発言できるかできないかってところで言うと、今島谷さん言われたように、やっぱり子どもが持っている語彙や限られた経験、あるいは授業でいえばこれしか知らないっていう、自分の視野の狭さっていうところが、やっぱりどうしても邪魔をするので、そこをどう、大人の側で子どもの声を拾えるのか、子どもが何を言わんとしているのかを汲み取れるのか、あるいはどうしたら子どもの声を私たちはしっかりと受け止めることができるのかっていうところに、かなり工夫が必要にはなってくるんだろうなというふうに思った次第です。

それと、同時に工夫の点で言えば、ICT機器を使う等で、例えばその場にはいられなくても、何らかの形で人前で発言することに抵抗のない子と、またすごく抵抗のある子って、やっぱり子どもって本当多様なので、あらゆる層の子どもの発言を拾うためにどういう発言の機会を用意するか。さあ、みんなの前で一緒になったから発言しなさいっていうのであれば、言ってみればノイジーマイノリティの声しか拾えなかったりするんですよね。それを子どもの声だって、私たちは結構やりがちなので。

あらゆる手段、特に今 Chromebook 等の 1 人 1 台端末もあるので、直接自分の名前が出

ない形での発言の方法っていうのがやっぱり大いに取り入れながらやれると、かなり意見の集約ができてくるのかなというのが1つ。

それに関連してあと2つ、手短かに申し上げるとすると、子どもの声を出してもらうこと以上に、未来の象徴である子どもがその場にいるってことこそが、私はすごく意味のあることだっていうふうに思うんですね。私も地域や学校をつなげて新しい教育やっというって活動をいろんなところでやっていますけれど、小・中学校の子どもたちを招けた会っていうのは、大人の議論がとにかく盛り上がります。実際に私たちが何のために議論しているのか、どこを目指そうと大人たちが多様な意見をぶつけ合っているのかっていうのが、そこに子どもが間に入ってくることで、なんというか違いが、ただぶつかるだけではなくて、違いがぶつかり勢いをつけて新しい意見が生まれる、みたいなことが本当に頻繁にあって、そこが子どもの象徴としての大いなる効果だなんていうふうにも思うので。もうほんといてくれるだけでもいいなんていうふうに、私は思っていたりもします。

で、最後に子どもの発言をちゃんと拾わなきゃいけない。そのためにICT等あらゆる手段を使わなきゃいけないっていう手法の面と、子どもはいてくれるだけで大丈夫なんだっていう面と、最後にその子どもの意見を聞いて、要は学校運営にも参画させて、みんなで学校創っていこうというのは、要は学校内民主主義をつくっていこうということの言い換えだと思うんですね。私たちの社会は、民主主義で動いているので、この社会の仕組みが学校の中に使われていなければ、学校で学んだことをそのまま、要は先生が言ったことを一生懸命やります、という子がそのまま社会に出ても、社会だ民主主義だ自分の意見言えと言われて、やっぱ固まってしまう、指示待ちになってしまうということに陥りがちなので、いかに学校の中で民主主義的な経験をさせてあげられるかってところにすごく大きな意味があるんだと思うんですね。

もしかしたら発言させたら一部の子だけかもしれないし、ネット上で出てくるときには語彙のある子どもだけかもしれないんだけど、みんなで決めようとしているっていうその雰囲気を感じてきたことっていうのは、子どもの民主主義に対する民度を確実に、じっくりとではあるけれど上げていく。すごくいい教育効果を私は持っているんだと思います。民主主義は、もうその構成員の民度に確実に依存しているので、要は民度が低ければ民主主義の結果、いい結論なんか絶対出ないんですね。この子どもの民度をいかに上げていくのか。そこはやっぱ先生方には子どもの成長を楽しみながら、じっくり子どもの声を待っていただけるといいのかな。なんかそんなふうに思った次第です。以上です。

（茅野座長）

学校はそういう意味で社会の写し鏡っていう部分もあるし、逆に言えば学校が変われば社会も変わっていくかもしれない。もっと積極的な部分もあるかもしれないですね。

（下山構成員）

ちょうど今NSDって言って、県の新しい学校づくりを建物から始めるような取組が始まって、特別支援学校もさせていただいてるんですけど。その中でどんな学校がいいかなっていうのを、障がいのある子どもたちが、ワークショップで様々な意見が書けるような、絵が描けるような紙が渡されたりして、そこに書いて「こうがいい」とか「こういう色が出た」とか、様々な言葉だけじゃなくて、やっぱり障がいのある子たちは体験的なものがすごくいい学びになるので、そういう形で表現をされていたりするんですね。

だから、学校側も様々な子どもが意見を言いやすいというか、言葉だけじゃなくて、その表現方法は学校がきっといろいろ考えてくださるような気がするんだけど、でも一方でこういうやり方もありますよ、という例を示せば、学校側もやりたいことを具体化できていいのかなっていうふうに思ったりします。

（茅野座長）

ありがとうございます。続いていかがでしょうか。

実践校の進め方の話から、一斉指導以外の学び方を知ってるかっていう話や、教室空間の話なんかもありましたし、先程視野の狭さという表現であったんですけど、子どもたちが参画しようにも、他のやり方というか学び方があるんだってことを知らなければ、その味わったことのないものに関しては意見が言い出しにくいというか、こういうことを選びたいということもそもそも出てこないということを考えると、少なくとも、他の選択肢としてこういうものがあり得るんだってことは、子どもたちがどこかで1回は実体験として経験してないとその先に進まないのかなと。選びなさいって言われても、やったことがないものを選ぶというのは、選ぶの意味がすごく表層的すぎて積極的な意味で選んでるとは言い難いかなと。それは、早坂先生の言葉を借りれば、民主主義っていうのはどういう意味か、選ぶだけが民主主義かと言われたら多分そうじゃないだろうという話になると思いますので、そのあたりもあるのかなっていうのが1点と。

あとすいません。私みたいな立場だと、何て言うんでしょうかね。例えば学ぶ方法を選ぶってすごく大事だと、本当に思うんです。ところが学ぶ方法だけ学べるかって言われたら、私は少し否定的で、何かの内容に伴ってその学ぶ方法と一緒に学ばれるはずなので、学ぶ方法だけ取り出すことはできないだろうと。そう思ったときには、学ぶべき内容、何

を学ぶのかということと、それをどう学ぶのかという内容と方法をセットにしながらか議論をしていかなきゃいけない。で、ある意味方法から入ってきてもいいと思うんですけど、方法から入ってきた場合、「単に方法を入れました」というのは、ちょっと私としては受け入れ難いところがあって、それはその内容を学ぶためにその方法から見ると確かにいいよねっていうような議論を、ぜひ実践校にはしていただきたいな、というふうに思うところがあります。

それともう1つ、いちばん最初の早坂先生の成果の話に戻ってしまうんですけど、ある意味成果と謳わなくてもいいのかな、というふうに個人的には少し思ってしまうところもあって。実施プロセスをまとめて共有してくださいと。といいますのは、その実施プロセスの中に「子どもが参画しました」とあった場合、その参画のときにこういう苦労がありました、あるいは、物事には必ず光と影の部分があると思いますので、よい部分だけじゃなくて苦労の部分もあると思うんですよ。でも、そういう部分も含めて共有していただいて、やっぱり苦労も伴うんだけど、影の部分もあるんだけど、子どもたちの光の部分があるんだよ。それは私たちが意図的、計画的に計画したことでもあるし、早坂先生の言葉をお借りすれば創発性の部分も含めて、こういう光の部分があるんですということ、プロセスとして共有させていただければありがたいかなと思った次第でございます。すいません、座長でありながら少し個人的な意見も申し上げました。

（島谷構成員）

要件のところなんですけど、ずっと私、なんで違和感を覚えるのかなって考えていたら、Aの手法論が最初に出てくるから、学校側も結構身構えるだろうなって思ったんですね。Cの目指すアプローチ像を提案する中で、その中で今回は大きい学校の仕組みを変革するところに対しては支援したいという、そういう構造の方がいいかなって思うので、Cが先にあって、その中で仕組みの変革に属する取り組みを行ってほしいということを伝えた方がいいかなっていうふうに思いました。

あと、さっきの子どもの意見云々の話は、「学校準備段階や実施プロセスの過程で」みたいな感じで、ちょっと柔軟性を出した方がいいかなというふうに思いました。さっきの早坂先生のおっしゃる通り、いることに意義があるっていうのは確かにおっしゃる通りだなっていうふうに思ったので、ただその段階としては、準備段階から必ずというよりは、まあプロセスの過程でもいいのかなって思うので、少し広めにとってというところは少し感じました。

（茅野座長）

ありがとうございます。今、掲載の順序の話もありました。先に聞けばよかったかもしれませんが、このABCDE、Eはちょっと話がでましたけど、AからDは必ずですかね。それともAには今「必ず」って入ってますけど、BCDはマストではないって感じですか。

（水野課長）

全てマストかなと思いがらつくっていたんですが、その辺りの御意見も頂戴できれば。

（島谷構成員）

でもまあ仕組み変革、やっぱり、やって大きく変える例が欲しいってところだと思うので、やるからには支援もするよっていうセットで出していけばいいと思うので、行政の意図として必ずAなんかは入れた方が良くと思います。

（茅野座長）

ありがとうございます。続いていかがでしょうか。例えば、熊谷さんの保護者の立場から見て、ABCDの話いかがでしょうか。

（熊谷構成員）

子どもたちが参画するというのもう大賛成ですね。ABCDに関しては、まあいいんじゃないかなとは思いますが。先程も話に出た児童会、生徒会とかと連携していくというのももちろん重要ですし、または学校に来られない子どもたちも今多数いらっしゃる中で、今回は一人ひとりに合った学びの実践校ということで、これをどうしていったらいいかという1つの柱になるのかなと思います。解決方法もいろいろ多様化してて、学校に来れない方々にどのようにしていったらいいか、その中で児童会、生徒会で話し合いながら、子どもたちがどう関わっていくかっていうのも、いろんなアイデアが出てくるのではないかなと思いますし、いじめの問題なんかは生徒会が中心になってやっていくことによってなくなったというお話もあったりもします。

情報も踏まえながら具体のアイデアを学んでいくということが重要なんですが、学校教育があって、また生きる力の中では社会教育的なこともあって、しかし、家庭教育っていうのが私は結構重要なのかなとも思っていて、そこは保護者だったりするわけです。です

ので、この改革案の中には、保護者だったりとかP T Aって出てこないんですけど、子どもたちのためにとても積極的にやっている、他県と比べても素晴らしいものがあったりもしますので、保護者の参画的なことが入るといいと思います。

いわゆる子どもだけじゃなくて、親がやはりここで変わっていかないと、本来の学びというか、子どもたちにとっての将来に生きる力を育むところにつながっていかないとという部分があったりしますので、進め方の要件に、保護者やP T Aの連携なんかも、どこかに加えていただければありがたいと感じます。学校の改革には絶対に保護者の力もどこどこかで関わってくるとお思いますので、そういう部分で学校全体がチームとして、子どもも保護者も学校も地域も企業も入ってくるとなおさらいいわけですが、そんな形で取り組んでいけたらと思います。

自己肯定感と言いますが、それってやはり大人の影響って結構多かったです。今の子どもたちと触れ合うと、我々が子どもの時よりとても優秀で自分の考えもしっかりしているという部分もあったりしますが、やはり大人の影響も大きいと思いますし、その中で自分らしく生きていくってということもとても重要だと思いますので、そんなことを要件の中にちょっと盛り込んでいただけたらいいかなと思います。

A B C Dに関してはとてもいいと思いますが、ただなんか評価するようなものでもないのかなとも、ちょっと感じました。逆に評価するというのも大変難しいのではないかなと感じたところです。以上であります。

（茅野座長）

ありがとうございます。最後の方のお話で、例えばDで広く共有するっていうの中には、Bとも関わるかもしれないけど、地域の方たちとも共有していくっていう部分も大事にしたいなというふうに思います。

Cのところでは、目指す学校像って、今私たちがここでどういう学校を目指そうかって議論したんですけど、個々の学校の目指す学校像をしっかり持っていただきたいですし、それがちゃんと今の教育に対して相応しいんだっていうこともしっかり持つておかないと。ともすると、目指す学校へのアプローチという「アプローチ」の方だけがすごくクローズアップ、一人歩きして、本当は目指す学校像をしっかりした上で、そのためのアプローチのはずなのによっていう部分が懸念される場所もあるので、ぜひアプローチだけにとらわれないように、実践校にはお願いをしたいなというふうに思いました。

いかがでしょうか。残り少なくなってきましたんですけど、③番から入って②番の方に来ましたが、改めて例えば③番の方を見返していただいたときに、そういえばもっ

とこういうことも、というようなことがございましたら、御意見いただければと思うんですが。

早坂先生、いかがでしょうか。

（早坂構成員）

ありがとうございます。前回の会議だったかと思いますが、島谷さんが言われたことが、実は私の中でずっと、どう答えを出していったらいいかなっていうのが、頭の中で回りが回り続けていたのがあって。それが何かっていうと、トップダウンとボトムアップの配合割合っていうお話が、前回あったかと思うんですね。つまり、県の支援として全県に渡って、学校を支援していくトップダウン的な支援の在り方と、各学校がそれぞれに自主性を生かしていくところ、先程からも話題になっているバランスの問題なんだと思うんですね。

で、常々申し上げてきたように、やっぱり旗を振っていただきたい、知事と教育長にはもう今回共同宣言が出たものを、さらに振り続けていただきたいという思いは変わらないんですが、学校によって山頂を見たときに「だったら私たちの今地域の財を活かしてやれること・やりたいこと・目指すべき方向はこれだ」ってクリアに出てきやすい学校と、「いや、山頂が遠いぞ」と、「あそこまでどうやって行けるんだろう」っていうふうにポカンとなっちゃう学校と、あるような気がするんですね。

で、そうなったときに、伴走支援っていう形で何ができるだろう、つまりトップダウンの側にもう少し寄せた考えで、何かもうちょっと意見を出しておいた方がいいのかなっていうふうに思って考えてたんですけど、例えば長野の山であれば、その山頂に至るプロセスに山小屋がありますよね。どのルートで行ってもいいし、どの山小屋を通ってもいいんだけど、どこかにチェックポイントがやっぱりあって、少しスモールステップ化してあげるっていうのは大事なのかな、なんていうふうに思ったんですね。

山頂がやはりあまりにも遠い場合は、この山頂に向けて5段階ぐらいのプロセス、どこから踏んでもいいわけですけど、5から行ってもいいし、5を経由して3に行ってから4に行ってもいいのかもしれない。それは学校ごとに任せるにしても、ある程度の選択肢があった方が、イメージが湧きやすい学校もあるだろうし、いや、そんなのいらなくて自分たち流に行くよっていう学校はもう行っていただければいいしっていうところで、このポカンとしちゃう学校に対して何か県としての支援があるとしたら、そのチェックポイント的なものが途中で用意できるかいいのかな。そんなふうに感じました。

結論を言うと、ボトムアップをととても大事にする。この長野の風土を全面的に活かす

つ、今回リーダーが旗をしっかりと振ってくれてくれるって、このチャンスを逃さないためにも、少し県としての意思を、どこか山のポイントポイントに要所として押さえておくみたいなことがあってもいいのか、そんなふう感じた次第でございます。

（茅野座長）

武田教育長が何か言いたげでしたけど、いかがですか。

（武田教育長）

学校にとって、あるいは学校の先生たちあるいはその地域にとって、この実践校に取り組むメリット、良さ、やって良かったというのをどう創り出していかってという問題が1つあってね。その成果云々っていうのとちょっと関係するかもしれないけど、加賀市では、何かやっていますか。

（島谷構成員）

学校現場のインセンティブって、困っていることが解決できるかどうかっていうところ、例えば学びの改革も一斉授業ですごい限界を感じて、どうしてもあの子とあの子とあの子が入ってこない。でも、あの子たちにどうしても学びの楽しさを分かってほしい。そのときに結局学びを変えて子どもが変わったっていうことが、学校現場の全てで、県が何を言ってとかどうでもいいわけで、子どもの変化がもう全てじゃないですか。だから、そこに結局結びつけられるようなものを御提案として挙げてもらわないと、多分続いていかないと思うんですよね。そこを学校がちゃんと捉えて提案を出せるかどうかっていうところが、子どもが変わっていけば心配しなくても絶対進んでいくと思うんです。なので、そのなんていうか、課題設計、設定をどう学校に組んでもらうかっていうところのアプローチが大事なかもっていうふうに思いました。

さっき早坂先生の話もお聞きしてて、成果をどう見るかっていうところは、頂上に向かって進み出しているとか、変化している変化率みたいのところを見てあげるのが大事かなと思っています。

地域、子どもの状況によってスタート地点は全然違うので、やっぱり変化している、変わってるっていうことを認めて、公表してあげて、出してあげて、保護者の意見も拾ってやっぱり肯定してあげる、っていうところが、次もうちょっと進もうっていう気持ちになれる部分だと思うので、その辺の仕掛けは結構大事かなっていう。

（茅野座長）

ありがとうございます。手を挙げていただくときの、目指す学校像じゃないけど、それをどういうふうに学校として設計していくのかっていうところは、結構重要なポイント、冒頭のところで加配がなくなっちゃうとなんとなく取組が薄くなっちゃう、なくなっちゃうっていう話もそうかもしれません。願いとか当初の設定した課題がしっかりしていれば、それは加配の有無に関わらず、その後も頑張っ解決というか、目指したい、達成したいということにつながるのかなというふうに思いました。

ありがとうございます。大変申し訳ないんですが、お時間となってきました。本当に長い時間にわたって活発な御議論ありがとうございました。本日の意見交換のポイントについては、また事務局の方で整理をお願いいたします。

この会議は、次回が最終回となります。本日も、例えば「1時間ごとの授業の取扱いをどうするか」と言ったら議論が深まったように、次回は応募のイメージ等がはっきりしてくると、より議論が深まるかなと思いますので、また事務局の方で御検討いただければと思います。

時間ですと言ったんですが、最後やっぱりこれだけはということがございましたら、全体を通してで構いませんので、御意見があれば伺いたいと思います。いかがでしょう

（熊谷構成員）

ちょっと1つだけ、今皆さんの話聞いている中で、手を挙げた学校が目指すべき部分の通過点的なポイントの話ですが、まだちょっと私の方でも何をしたら山頂行けるのかなっていうのがなんか漠然としてて、これをすれば1合目2合目というような形の成長、そういう段階的なものを示せるとより一層分かりやすいのかなと思いました。ただ単に1つのルートじゃなくて大きなゴールを目指す中で、それぞれの登り方があってもいいんだけど、ここが1つ目のゴールだよ、2つ目のゴールだよ、というのを積み重ねて、最後の登頂まで行くっていうような。段階的に行動改革することに合わせて、学校全体、地域全体の意識がどう変わっていくのかのプロセスが目に見えてわかるようになると、参加してトライアルしてる学校にとっても1つの基準になるのかなと感じたところです。

（茅野座長）

ありがとうございます。続いて最後これは、という御意見ございますでしょうか。

（島谷構成員）

「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」検討会議（第2回）
（令和6年9月4日）

各市町村教育委員会と県が本当に同じ方向を向いてるっていうことを、ちゃんと現場が実感できるようなチーム編成をするということかなと。県が旗を降ってくれないと現場って頑張れないと思うので、市町村教育委員会との連携は絶対マストだと思います。

（茅野座長）

続いていかがでしょうか。早坂先生よろしいですか。

（早坂構成員）

じゃあ今の島谷さんの意見にちょっと関連して、今回やっぱり市町村教育委員会との関係性が肝だになっていうふうに思うんですね。最終的にはその管轄の小・中学校と密接な連携あるのは市町村の方なので、その今回第2回の会議の前に7月の学び円卓会議の知事＋教育長の共同宣言が出されて、何かこう、長野県教育長＋市町村教育長の共同宣言みたいなのが出せると、とても面白いことになるんだろうな、というふうに今ちょっと感じた次第です。ちょっと自治体も多いんでね。なかなか難しいと思いますが。以上です。

（下山構成員）

ありがとうございます。私の方は障がいのある子とか不登校のお子さんの学びをいかにしていくかっていうのをずっとやってきたので、こういったことを中心に、子どもたちが多様で柔軟性のある学びっていうのが、学校の中で実現できればなっていうふうにすごく思っております。

（茅野座長）

ありがとうございました。私の進行の不手際で、うまくいなくて申し訳ないです。④のネーミングについてはちょっと議論を深めることできませんでしたので、委員の皆さんもしいいアイデアがありましたら、事務局の方にお届けしていただければと思います。

皆様ありがとうございました。それでは、司会を事務局の方にお返ししたいと思います。よろしく申し上げます。

（水野課長）

ありがとうございました。茅野座長、それから構成員の皆様、闊達な御議論をいただきまして、どうもありがとうございました。最後になりますが、武田教育長からひとこと申し上げます。

（武田教育長）

今日はありがとうございました。今日お話を深めていただいて、次に向かってまた1歩進めるかなというふうに思います。話の中で私2つのことを感じていたんですけども、1つはですね、今長野県では高校を再編していて、統廃合と進めている中でですね、学校っていうのは地域にとって私たちが考えてる以上に、重要な存在というか、ある場合にはその町、村のシンボルであったり、あるいはその町、村のアイデンティティを示すものに、学校というものはなっているんだなっていうことを、改めて感じるところであります。

この実践校についても、その地域にあるその特有の願いとか課題とかそういったものと切り離れたものでは意味がないのかなっていうことを思っていて、今日も地域との関係ってことを色々言っていたので、ここは重視して考えていかなきゃいけないなっていうふうに思っています。

それから2つ目は、先生たちのことなんですけども、長野県ではですね、今の自由進度学習に取り組んでいる先生が県下各地にいるんですけども、それは先生たち個人が取り組んでいるんですね。学校としてとかじゃなくて、で、その底流には、島谷さんのおっしゃっている、その教育観とか子ども観っていうのがあって。やっぱり子どもたちが自分で主体的に学習していくことが大事なんだよねっていうことで挑戦している先生が多いんじゃないかというふうに思っています。やはりこの先生たちが、自分が内からやっていく、早坂先生のおっしゃる内発的な動機付けというのは私もすごく重要なことだと思って、その内発的な動機付け、内発的なものを重視していくときに、教育行政として、まずはその学校とか先生を信頼することっていうのがいちばんベースにあるんだろう。そんなことを思っています。

そういったことで今日様々な御意見いただきましたので、次のところにはまたまとめて御提案して、さらにお皆様方のお力を拝借できたらというふうに思いますので、引き続きよろしくお願いします。

（水野課長）

ありがとうございました。では、最後になります事務局から連絡をさせていただきたいと思っております。

（石川係長）

次回の予定についてですけども、先程申し上げました通り、第3回最終回は、9月26

「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」検討会議（第2回）
（令和6年9月4日）

日曜日、今日と同じ10時から12時の2時間ということで開催したいと考えております。次回もリアルとWeb会議の併用で、リアルは今日と同じこちらのお部屋で予定しております。どうぞよろしく願いいたします。

（水野課長）

それでは、これもちまして会議を終了いたします。どうもありがとうございました。